

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Life of Bronisław Piłsudski : Bronisław Piłsudski's Unwilling Journey

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 紘一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003749

ブロニスワフ・ピウスツキの不本意な旅路

井 上 絃 一*

ブロニスワフ・ピウスツキは、1866年11月2日、リトワニアに生まれ、1918年5月17日（推定）、パリにて自殺を遂げた。彼はこの間に、リトワニアからペテルブルグへ、ペテルブルグからはオデッサ、スエズ運河を経てサハリン（樺太）島へ、その後は日本に一時滞在した後、太平洋、北米大陸、大西洋を横断して懐かしの祖国ポーランドへ帰着するという形で、東回りの世界一周を「ほぼ」果たしている [井上 1983a]。ここで「ほぼ」と付記するのは、以下の理由による。

当時のポーランドは、ロシア、プロイセン、オーストリア三国によって分割されており、ピウスツキが世界周航の果てに辿り着いたのは、オーストリア領のポーランド（ガリツィア）だったのである。彼はその後も、ロシア領に編入されていた故郷のリトワニアはおろか、ワルシャワへすらも出向いた形跡がない。従って、リトワニアに発した彼の旅はガリツィアで終わり、ポーランド内を走るロシアとオーストリアの国境が、彼に世界一周の完遂を断念させる結果となったのである。ピウスツキは望郷の思いを胸に秘めて、ひたすら東へ向かって歩き続けた旅人であった。もしも地球が丸いなら、彼は出発地へ戻れた筈であるのに、彼にとっては地球が決して「丸く」はなかったのである。

i. リトワニアにて

第三次三国分割下で最大かつ最後のポーランド蜂起（1863年）の硝煙もいまだ消えやらぬ頃、リトワニアの首都ヴィリニユスの北東60キロにあるズーウフの荘園においてブロニスワフは呱呱の声をあげた。父親はユゼフ・ヴィンツェンティ・ピョトル・ピウスツキ、母親はビルレヴィチ家より嫁いだマリア・ピウスツカ。ブロニスワフは第三子の長男であり、正式にはブロニスワフ・ピョトルと命名された。翌1867年には、弟ユゼフ・クレメンスが誕生している。この年子の弟は後にポーランドの国家再興に挺身し、1918年にはそれを成就させた人物である。ユゼフは第一次大戦後も「ピウスツキ元帥」として世界中にその令名を轟かせ、ヒトラー、ムソリーニ、フランコに伍

* 中部大学国際関係学部 本館共同研究員

して欧州の4独裁者の一人に列せられた事もあった [井上 1983b: 24; 木村 1961: 346]。

そもそもピウスツキ家は由緒正しいリトワニア士族(シュラフタ)の家柄で、母マリアの実家もリトワニアの名門ビルレヴィチ家だったから、世が世なればプロニスワフには何不自由ない暮らしが約束されていた筈である。しかるに隣国の三列強によって国を奪われたポーランドは疲弊し、あまつさえ度重なる蜂起の結果、国土は荒廃の極みに達していた。作家東海散士(柴 四郎)はこのポーランドの惨状を『佳人乃奇遇』で共感を込めて活写している。ピウスツキ家も例外ではなかった。父ユゼフは1863年の蜂起に地方指導者の一人として参加し、その真直中にマタイトコであるマリアと秘そやかに結婚式を挙げたのであるが、近親婚の故に特赦状を得るため奔走せねばならなかったと伝えられる。蜂起が鎮圧されるや、ユゼフは妻の相続地ズーフに身を隠し、農園の経営に当たった [井上 1983b: 30-31; GARLICKI 1979: 11-12; JĘDRZEJEWICZ 1977: 15; SIEROSZEWSKI 1921: VIII-IX]。ズーフは農地と森林を併せると3万エーカーの荘園で、平家建ての屋敷の切妻正面は、白塗りの柱が古典様式のペディメントを支える瀟洒な構えであった。この木造の母屋には食堂、寝室、サロン、ビリヤード室、読書室など部屋数12を数え、その他に玄関ホール、廊下、食器室、食料庫も備わっていた。母屋のすぐ裏には別棟で炊事場と貯蔵庫が立ち並び、母屋の左手に続く堂々とした菩提樹の並木の外れには来客と使用人のための離れが建っていた。荘園にはさらに、美しい木立ちに池を配した庭園もあって、子供たちの格好の遊び場となった。屋敷のすぐ裏手には松や樅の鬱蒼と茂る広大な森林が迫り、時として熊が迷い出たと言う [PEŁCZYŃSKA 1934: 142-144。この論文には6葉の写真が掲載されている。HUMPHREY 1936: 18-19; LANDAU 1930: 15-16; PATTERSON 1935: 22-23]。

農学を修めていたユゼフは、水を得た魚のように、ここで多角的機械化農業の実践に乗り出し、つぎからつぎへと醸造工場、酒倉、酵母工場、蒸気製粉所、松根油工場、製材所などを開業するも、いずれも経営不振に陥り、負債は募る一方であった。しかしながら、父親の理念の所産であるこれらの工場経営は、それを至近距離で観察したプロニスワフに機械に対する関心と進取の気性を育てなかつただろうか。また父親は折りにふれて趣味のピアノを家族に弾いて聞かせたと言う。プロニスワフが後にサハリンで立証した「耳の良さ」も父のピアノのお蔭ではないかと思われる [HUMPHREY 1936: 20; PATTERSON 1935: 20; SIEROSZEWSKI 1921: IX]。

ズーフでは年子の弟ユゼフに続いて、3人の弟妹が相継いで誕生し、都合7人

(女3, 男4)の子供たちの養育は専ら母親の手に委ねられたらしい。弟ユゼフは後に、母マリアから受けた教育について次のように語っている。

「私たちの母は不屈の愛国者で、蜂起の失敗がもたらした苦痛と絶望を私たちに敢えて隠そうとしないばかりか、まさにわが国の敵とのさらなる戦いの必要性を力説する教育を行った。私たちが幼少の頃より、母はわが国の偉大な詩人たちの作品、それも特に禁止されている作品を語って聞かせ、ポーランド語の書物だけを買ってくれた。わが国の大詩人のうちで母が最も愛したのは、クラシンスキだった。(中略) 母は私たちに自立した思考力を培い、個人尊厳の感覚の涵養に努めた。この感覚は私の心中で後に、次のように定式化されていった。“人間と呼ぶに値するのは、確かな信念を持ち、それを結末にこだわる事なく行動に移すのに成功する者だけである。”」
[PIŁSUDSKI, J. 1931: 11-12]

兄プロニスワフも同じ愛国教育を体験した筈である。マリアはこれらの禁書を自分だけが知る場所に秘匿していた。国禁書の所持は、もしも発覚すればシベリア流刑と相場が決まっていたからである。マリアは幼い子供たちを集めては、禁書を朗読するのを常としていた。そのレパートリーにはポーランドの栄華を印した偉人・王侯列伝や、ポーランド蜂起の英雄でアメリカ独立戦争にも参加して武勲のあった、リトワニア生まれのコシチューシコの話などが含まれたが、就中マリアはポーランドの三大詩人(クラシンスキ、スウォヴァツキ、ミツキェヴィチ)の詩を力を入れて朗詠した。だが、その途中で来客を告げる馬車の鈴が響くか、見知らぬ人の来訪があると、このささやかな「陰謀」は即座に中止となり、国禁書は素早く元の場所にしまわれるのだった [HUMPHREY 1936: 24; PATTERSON 1935: 23]。ユゼフ・ピウスツキの伝記作家ハンフリーはマリアの躰がとても厳しかった事を次のように伝えている。子供たちは「例え誰であろうとも、人を自分より劣る者としては見はならなかった。使用人には、子供たちが礼儀正しく頼まない限り求めるものを渡してはならぬと申し付けてあった。長男のプロニスワフは生真面目な少年で、勉強にのみ興味を示した。ズーラと愛称されたゾーフィアとジュークという愛称のユゼフはなかでも最も活発で、大の仲良しだった」 [HUMPHREY 1936: 22]。もの静かで心やさしいプロニスワフと敏捷果敢で統率力に恵まれた弟ユゼフの性格の違いは幼時より歴然としており、プロニスワフの人格形成と生きざまの選択を考えるさいには充分留意する必要がある [井上 1986: 29]。

子供たちが成長すると、一人のスイス女性が住込みの家庭教師として雇われた。彼女は子供たちにフランス語とドイツ語の手ほどきをした。けだし、この時代のピウス

ツキ家ほどの資産家ならば、それはどこにでも見られた事である。しかしながら、ポーランド語を母語とするプロニスワフの最初に学んだ外国語が、同じスラヴ系のロシア語でなくて、仏、独語だったのは、特筆しておく必要があると思う。この学習体験は、後にサハリンで未知の言語を独力で学び始めた時に、かなり役立ったと考えられるからである。

ズーフにおけるピウスツキ家の生活は、上述のような父親の事業不振があったにせよ、両親が幼い子供たちに囲まれて団欒を楽しむ、曲がりなりにも幸せな家庭のそれであったろう。しかし、幸福は永くは続かなかった。

1874年7月4日、両親や使用人が出払って、子供たちだけで留守番をしていたズーフに火事が発生したのである。折りあしく吹き荒れた南東風が、火元の貯蔵庫から母屋へと火の手を延ばし、みるみる内に、母屋の北側に位置する新築中の別館、刈り入れたばかりの穀物を積み上げた納屋、製粉所、そしてその他の工場まで焼き尽くし、さらには付近の森林すらも数キロにわたって延焼させてしまった。母屋の周辺で焼け残ったのは、風上にあってしかも母屋とは並木で隔てられた離れと、皮肉な事に母屋に最も近い炊事場だけである。父親は、注文してあった大型ボイラーを引取るために30人の男衆を連れてヴィリニウスへ出掛けていたので、消火はおろか、家財道具を運び出す人手にも不足する有様で、焼死者の出なかったのは不幸中の幸いであった。かくしてピウスツキ家は着の身着の儘で焼け出されてしまった訳である。暫くは延焼を免れた離れに避難したものの、結局、一家は首都ヴィリニウスへ引越す事になった [HUMPHREY 1936: 25; JĘDRZEJEWICZ 1977: 18; PATTERSON 1935: 25; PEŁCZYŃSKA 1934: 144-145; SIEROSZEWSKI 1921: IX-X]。

10世紀以来の歴史を持つ古い都会ヴィリニウスには、ゲディミナス王朝が14世紀にここを首都に定めて以降陸続と造営されてきたゴシック、新古典、ルネッサンス、そして最も多いバロック風の建造物が軒を連ねており、町全体が建築史の博物館のような観を呈している。もし町を一望のもとに見下ろす丘に立つならば、「寺院の町」の異名通り、カトリック、ギリシャ正教、ユダヤ教の寺院の円塔や尖塔が所狭しと林立するのを見いだすであろう。ここはまさに「西と東の会おうところ」なのである。そのことは住民の民族構成にも窺う事ができた。ここではポーランド人、リトワニア人、ユダヤ人、白ロシア人、タタール人の上にロシア人が君臨していたのである [HUMPHREY 1936: 26; PATTERSON 1935: 26-27]。

8歳のプロニスワフがヴィリニウスに転居してきた頃は、ロシア化政策が進捗し、多くのカトリック教会がロシア正教会の看板を掲げ、ある寺院はロシア軍の将校用賭

博場へ、また由緒正しい修道院は兵営へと変身していた。宮殿も例外でなく、壮麗な装飾は取り外されて監獄、病院、政庁として利用されていた。劇場も閉鎖され、街路には至るところ「ポーランド語の使用を禁ず」との布告が掲げられた [HUMPHREY 1936: 26-27; RADDEWAY 1939: 12]。ズーフの片田舎で両親の手厚い保護のもとにポーランド文化を享受してきたプロニスワフの目には、このむくつき「ロシア」がどのように映ったであろうか。それはともかく、彼を取り巻く社会的環境はここで一変したのである。

ピウスツキ一家はユダヤ人地区近くの中流家庭用アパートに入居した。残された写真によると、このアパートは二階建ての棟割り長屋の一隅を占め、上下階を併せても恐らくは5部屋に満たないであろう。ここに親子9人が寝起きを始めた訳で、ズーフの屋敷とは雲泥の差である [HUMPHREY 1936: 27]。母マリアは蒲柳の質にもかかわらず、ここでも相継いでさらに5人の子供を出産（双子の末っ子は命名を待たずに死亡）、さなきだに逼迫した一家の経済は一層苦しくなっていった。そのためもあろうか、一家は転々と転居を重ねていくが、興味深いことに、「広い面積を占めるユダヤ人居住区から遠く離れることは決してなかった」 [REDDAWAY 1939: 11]。

1877年9月、10歳を迎えたプロニスワフは年子の弟ユゼフとともに、ヴィルノ第一高等中学校（ギムナジウム）へ揃って入学した。これはロシア教師がロシア語で教える、いわゆるロシア・ギムナジウムであるが、高等教育を志すポーランド人子弟は、もしも国外へ留学でもしない限り、ここで学ばざるをえない仕組みになっていた。無論、「一人の皇帝、一つの信仰、一つの言語」を強要するロシア化政策の「成果」であった [HUMPHREY 1936: 28; PATTERSON 1935: 28; REDDAWAY 1939: 12]。例えば、ミツケヴィチ、スウォヴァツキといった詩人も学んだ、輝かしい伝統を誇るステファン・バトーリ大学（ヴィリニウス大学）は、1831年の蜂起の後で閉鎖され、ゴチック、バロック、ロココ、古典様式の建造物のメドレーとして名高い建物だけが、ロシア・ギムナジウムの校舎として使用されていた。他ならぬこのギムナジウムへピウスツキ兄弟は入学したのだった [PIŁSUDSKI, J. 1931: 10]。だから、妙な巡り合わせだが、プロニスワフはこれら愛国の詩人と「同窓」と言うことになる。

ギムナジウムでは、ロシア語で教育が行われるだけではなかった。ポーランド語を一語でも発すると処罰されるばかりか、祝祭日にはカトリック教徒の生徒をロシア正教会へ赴かせ、ロシア皇帝のためにロシア語で祈祷を行う事までも強制したのである [REDDAWAY 1939: 12]。カリキュラムには宗教、ロシア語・ロシア文学、論理学、ラテン語、ギリシャ語、数学、物理学、歴史、地理、(選択)ドイツ語かフランス語

といった教科目があった [JĘDRZEJEWICZ 1977: 32-33, 通信簿に記載の順序通り] が、恐らく、宗教と歴史の時間が最も苦痛であったろう。ポーランドの宗教（カトリック）と歴史の教育は、母マリアが引き続いて家庭で行った。

1922年、ワルシャワでユゼフ・ピウスツキ陸軍大臣と会見した新渡戸稲造は、その会見録を自著『偉人群像』に収めている。大臣（つまりプロニスワフの弟ユゼフ）はそこで、恐らく自らの体験に基づいて、ポーランドの歴史を守る女性の役割を以下のように高く評価するのである。

「左様、記憶力の弱い輩の中には、国を忘れた者もありましたらう、殊にポーランドの歴史も文学も、言語も圧政的政府のために消え失せんとしたこともありましたから。そこにゆくと婦人の力は偉いものであります。女性は大体保守的であつて、執着の念が深いから、学問以外の力を以て歴史を保存してくれます。ポーランド語を学校で禁じて、家にあつては母が故国の言葉で話をしてくれ、昔噺も、子守歌も、ポーランド語でしてくれるから、無意識にポーランド魂が胸中に植ゑられてこれが潜在意識となり、記憶の根底を作り、成長すると共に、この魂も深まる」[新渡戸 1935: 133]。

ポーランド女性の指南よろしきを得て生まれたピウスツキ兄弟のポーランド魂は、次第に外へ向けて、理不尽なロシア支配から自らを衛る社会的活動へ向けて、胎動しはじめた。これにはロシア・ギムナジウムの教育体制及び教育それ自体が、優れた「反面教師」となっているが、片鱗は既に述べてあるから、深入りは避ける。それよりも彼らが何をなしたかの方が、このさいは重要と考えるからである。

まず第一には、スピーニャ（ポーランド語で団結、結合を意味する）と称する学習サークルの結成を挙げねばなるまい。

1882年の春、中学5年生のプロニスワフとユゼフは友人のヴィトルト・プシェガリンスキと語らい、学校当局や警察が所持も閲読も厳禁している書物を読む事を通じて、「視野を広げ、愛国の気運を堅めかつ深める」[POBÓG-MALINOWSKI 1935: 45] ためにスピーニャを発足させたのである。初仕事は各自の蔵書をプシェガリンスキの部屋に持ち寄って、非合法図書館の開設であった。初代の議長にはプシェガリンスキがなるが、ほどなくプロニスワフが二代目に就任した。ユゼフは当初余り熱心な会員ではなかった。蔵書数が増えると、図書館はピウスツキ家に移された。1年後の1883年2月には、月額50ペイカを納める会員が16名に増えるが、殆どは公教育にも家庭教育にも飽き足らなくなったヴィリニユスの中学生である。活動が軌道に乗ってくると、ペテルブルグの学生革命組織を通じて最新の非合法出版物も購入するようになり、

同年の末には蔵書数が1000冊にも達する勢이었다。当然の成り行きとして、「例会」と称する非合法の会合が活動の中心となっていた。これは読後感を「自由に」語り合い、討論するのが目的だったが、やがて講読にも力が注がれるようになり、ダーウィン、ハクスレー、コント、スペンサーなどを読む一方で、学校では教えないポーランドの歴史、特に蜂起の歴史を熱心に繙いた [GARLICKI 1979: 18-19; HUMPHREY 1936: 32; POBÓG-MALINOWSKI 1935: 45-49; REDDAWAY 1939: 13]。

ニューヨークのユゼフ・ピウスツキ研究所にプロニスワフの日記が保存されている。これは1882年1月から1885年9月まで彼が折りにふれて書き綴ったもので、大変に貴重な資料である。同研究所の好意でそのマイクロ・フィルムが東京大学の吉上昭三氏の許に届けられているが、残念ながら筆者はまだ閲読の機会に恵まれていない。幸いその一部はイェンジェイェヴィチ編『ユゼフ・ピウスツキ年譜』に収録されているので、ここから適宜転載させていただく事にする。

「1883年12月4日（日）“われわれはリトワニアとジューーチにおける1863年蜂起の歴史を朗読した” [JĘDRZEJEWICZ 1977: 30]。

これは間違いなくスプーイニャの「例会」の記録である。ジューーチとはリトワニアの一地方で、ピウスツキ家もビルレヴィチ家もここに由来する事から、「例会」の主宰者はプロニスワフだったのではなかるうか。

それはさておき、プロニスワフは終始スプーイニャの中心メンバーであり続け、特に会員数が40名に達した最盛期には組織者としての手腕を遺憾なく発揮した。プロニスワフの友人である作家シェロシェフスキによると、「この分野では彼の方が弟のユゼフより優れており、ユゼフは彼に従っていた」 [SIEROSZEWSKI 1921: X] と評価されている。因みにスプーイニャは、ヴィリニウスのみならずリトワニア全体を見渡しても、最も早くに始められた青年の自主教育運動の一つであった [POBÓG-MALINOWSKI 1935: 45]。

これもスプーイニャの活動の成果ではあるが、未熟ながらも自らのアイデンティティを問い質した事を第二に挙げておきたい。

社会主義はロシア語の衣をまとして東より、ペテルブルグからヴィリニウスへやってきた [POBÓG-MALINOWSKI 1935: 76]。プロニスワフの表現を借りるなら、「われわれのサークルでも、新しい生活の偉大なる倫理的基盤としての社会主義と愛国心をめぐる議論が始まる」 [SIEROSZEWSKI 1921: XI] のである。議論は沸騰し、堂々巡りを重ねる中で、蕘蛇のように、大変な問題をつつき出してしまった。それが、自分たちは何者であるかという、アイデンティティの問題だったのである。というの

も、スプーイニャの同志たちは、ポーランド語を母語としポーランド文化を体現するという自意識を共有していたが、彼らの多くはまた同時に、ピウスツキ兄弟同様にリトワニアの血筋も引いていたからである。激論の末、「われらは“リトワニアのポーランド人”であり、われらの任務は、この国においてわれらが後見者たるべき他の“より弱い”諸民族に対し危害や圧迫を加える事なく、ポーランド文化 (polskość) を維持することにある。」という決議が採択された、とプロニスワフはシュロシェフスキに語っている [SIEROSZEWSKI 1921: XII]。激論の内容は遺憾ながら伝えられていない。これが唯一のありうべき帰結とも思えず、この他にどのような異論が出たのかも知りたいところだが、プロニスワフの個人的発言も含めて、定かではない。プロニスワフとしては、凡そ30年後に流浪の身でこの同じ難問に直面する事となるのである。

第三には、ピウスツキ兄弟が自らのリトワニア意識を行動で示した事実を挙げねばなるまい。当時のリトワニアには、まだリトワニア語で生活しているリトワニア人が大勢いた。地方の農村ではポーランド化した地主・士族層に対して、いまだ多数派を形成しており、首都のヴィリニウスですら職人層の多数はこのようリトワニア人であった。兄弟はヴィリニウスの職人たちを密かに集めて、ポーランド語の読み書きを教えたのである。「それが当時のヴィリニウスでは既にとても危険なことであり、“ロシア国家の安寧を脅かす” 犯罪としてシベリア流刑に処せられる」にもかかわらず、である [SIEROSZEWSKI 1921: XI-XII]。兄弟のこの行動を、労働者との連帯を求める戦術と評価するむきもある [HUMPHREY 1936: 32-33] けれども、同意できない。もしそうだとすると、プレハーノフの「労働解放団」とほぼ同時期にヴィリニウスでも同一の戦術が選択された事になるが、兄弟はリトワニア人の労働者に対してのみ働きかけを行ったのであり、ユダヤ人、白ロシア人、タタール人は対象外だったからである。これは無論人道的立場からなされたものだが、それに加えて、対象の選択においては兄弟の身内意識が強く作用したものと思われる。その証拠に、プロニスワフはこれを契機に「リトワニア語を熱心に学び始める」[SIEROSZEWSKI 1921: XII] のであった。

プロニスワフの青春時代をこのように政治活動、正しくは反体制運動一色で塗り潰すことは、無論できない。彼には彼なりの夢と希望と挫折と、そして恋があった筈である。彼が四半世紀後に再びヨーロッパへ戻った時、既に人妻となっていた幼馴染みのマリアと再会し、結婚することになる [安井 1971: 31, 38] が、その出会いと恋語らいの場所は、ここヴィリニウスであった筈である。

彼の日記には、さらに無邪気な一面も認められる。

「1882年2月27日（土）（前略）月曜日は皇帝の一回忌、火曜日は今の皇帝の即位式の日だから、10時に教会に来るように、とカルピンスキ訓辞。」

「1882年3月1日（月）今日はギムナジウムに行ったが、教会はさぼる。12時までジュークとチェスをして、一寸、授業に出る」[JĘDRZEJEWICZ 1977: 22]。

「1883年5月15日（日）皇帝アレクサンドル3世の戴冠式。街中に祝砲、教会の鐘。“窓辺に2本ずつローソクをともし、絶やさないう注意すべし、とのこと”」

「1883年5月16日（日）僕たちは皆、スパスカヤ教会へ追い込まれた。生徒全員が列席した」[JĘDRZEJEWICZ 1977: 26]。

少々解説を加えよう。最初の記事は、ギムナジウムの校長カルピンスキの訓辞をメモしたもので、一回忌を迎えるのは、1881年3月1日（露暦）に「人民の意思」党によって暗殺されたアレクサンドル2世で、今の皇帝とはその息子アレクサンドル3世のことである。アレクサンドル3世は、父の喪に1年間服した後即位し、さらにその1年後に漸く戴冠の儀に及んだ次第で、最後の記事からは戴冠式の祝典ミサへ無理矢理列席させられた悔しさが窺える。さすがのピウスツキ兄弟も、これだけはエスケープ出来なかったものとみえる。

ところで、当時の兄弟は知るよしもなかった事だが、4年後には兄弟とも、他ならぬアレクサンドル3世に対する暗殺未遂事件に巻き込まれて逮捕され、兄はサハリン、弟はバイカル湖の北方にあるキレンスクへ流刑となり、かてて加えて、プロニスワフはアレクサンドル3世の死去にさいして発せられた恩赦令によって減刑されるという具合に、このロシア皇帝とは浅からぬ縁で結ばれていたのである。その上、暗殺未遂事件の遠因が、後に述べるように、アレクサンドル2世の暗殺に求められるとすると、日記に記された、同帝の一回忌の日の兄弟の行動は、余りにも無邪気に過ぎると言わざるを得ない。

1883年から1884年にかけて、プロニスワフは個人的にかなりこたえた2件の出来事に耐えねばならなかった。恐らく、これは彼の人生で最初の挫折と言ってよいだろう。

1883年6月10日、年度末試験の結果が判明し、ユゼフは7年へ進級したのに、プロニスワフは落第であった。同日の日記には「今日は落第の事が脳裏を去らず、一日中気が晴れなかった。考え事をしながら歩き回り、殆ど何も食べなかった。いろんな計画を練ってはみるのだが、どれもこれも気を重くさせるばかりで、すっかり滅入ってしまった。」[JĘDRZEJEWICZ 1977: 27] と記されている。いつもなら、6年の現級に留められて傷心のプロニスワフを優しく慰めてくれる筈の母マリアも、折悪しく重

病で臥せていた。

母の容体は悪化するばかりで、11月5日、ワルシャワから招いたコシンスキ博士執刀の手術も甲斐なく [JĘDRZEJEWICZ 1977: 29]、遂に翌1884年9月1日、マリア・ピウスツカは42年の生涯を閉じる。遺骸は、母の母方のミハウォフスキ家の墓地に葬られた。

「母の死はピウスツキ家にとって大きな痛手だった。プロニシ（プロニスワフの愛称）の日記は1884年8月5日から12月27日まで空白である」 [JĘDRZEJEWICZ 1977: 31]。プロニスワフの受けた打撃もそれ程大きかったのであろう。

母の重病にもかかわらず、この年の学業は順調で、プロニスワフは無事7年へ、ユゼフは8年（最終学年）へ進級する [JĘDRZEJEWICZ 1977: 31]。近所に住む伯母のステファニア・リブマズナが亡き母に代わって家事を取り仕切るも、代役は所詮代役である。父ユゼフは、賃貸に出した領地の経営に忙殺されて家を明けがちで、そのうちに次姉のゾーフィアが母の主治医カデナーツィ博士に嫁ぐと、ピウスツキ家は解体を始める [SIEROSZEWSKI 1921: XII]。

1885年6月、プロニスワフはギムナジウムの7年を修了した。丁度その頃、学校当局がスピーニャの存在を嗅ぎ付け [SIEROSZEWSKI 1921: XII]、このためプロニスワフは放校処分を受ける [ARMON 1981: 305-306]。ピウスツキ家では、やむなく「プロニシをペテルブルグへ遣り、そこでギムナジウムの卒業試験に挑戦させる事になった」 [JĘDRZEJEWICZ 1977: 32] のである。彼は9月にヴィリニウスを離れ、ペテルブルグではひとまず親戚の家に落ち着いた [ibidem]。

一方、弟のユゼフは卒業試験にも合格して、めでたくギムナジウムを卒業、同年秋には、ハリコフ大学医学部入学のため騎馬でハリコフへ向けて旅立った [JĘDRZEJEWICZ 1977: 32-35]。これまでは何をするにも一緒だった年子の兄弟が、かくて独り立ちし、ロシア帝国の北と南へ別れて行ったのである。兄18歳、弟は17歳だった。

ii. 東へ

ii-1. ペテルブルグにて

ピョートル大帝の建設したこの北の都に、プロニスワフ・ピウスツキは1885年9月から約1年10か月ほど生活した。しかし極めて遺憾ながら、この間の彼の動静は、皇帝暗殺未遂事件絡みの情報を別にすれば、全くと言ってよいほど知られていないのである。ただ当初の1年間は、かなり真剣に卒業試験と取り組んだ事が推測される。なぜならば、彼は卒業試験に見事合格して、1886年9月には念願のペテルブルグ大学法

学部へ入学を果たしているからである。シェロシェフスキによると、「彼は仏、独両語に優れ、また露語に堪能であり、白ロシア語を上手に、そしてリトワニア語は少し話した。概して言えば、語学の才に恵まれていた。彼は熱意をもって学業に取り組んだ」[SIEROSZEWSKI 1921: XII]。

ところで、当時ペテルブルグで勉学中の大学生は出身地別に郷友会を組織していた。80年代前半に「人民の意思」党の指導で盛り上がった学生運動も、政府の大弾圧によって鎮静化され、郷友会のみが細々と相互扶助的活動を実践していたのである。当時のペテルブルグには20ぐらいの郷友会組織が存在したが、その加入が発覚すれば退学処分さえ受けかねない秘密サークルであった [佐々木 1977: 123]。

ヴィルノ郷友会の指導者は、ユゼフ・ウカシェヴィチという地質学専攻のペテルブルグ大学生だった。ところが、ウカシェヴィチはヴィリニユスのギムナジウムでプロニスワフの2年先輩であったから [POBÓG-MALINOWSKI 1934: 25; 1935: 90]、両者は中学時代から面識があった筈で、上京したプロニスワフが相談に行く相手としては、まず筆頭に挙げられるべき人物である。彼はまたポーランド人学生全体のリーダー格で、ワルシャワで有罪判決を受けた「プロレタリアート」党員の救援資金調達のために「音楽とダンスの夕べ」を開催したり、同時に互助会の出納係りも勤めていた [POBÓG-MALINOWSKI 1934: 25; 1935: 90-91] から、受験勉強中の貧乏生徒プロニスワフにとっては頼もしい先輩だったろう。ひょっとすると、「音楽とダンスの夕べ」にはプロニスワフが参加していたのではあるまいか。

1886年の初秋、大学では年度が改まって多数の新入生（そのうちにプロニスワフもいた）を迎えてほどなく、学生運動に2つの画期的な動きが見られた。一つは、ネヴェー河の対岸のワシーリー島（ここにはペテルブルグ大学があり、それ故最も多くの学生が居住していた）に「学生食堂」が開設された事である。学生たちには大好評で、連日数百人がここで昼食をとり、自由に交流し、忌憚なく意見を交換する事が出来るようになった。多くの貧しい学生には無料で食事が提供された。こうして、忽ちのうちに学生の溜り場が生まれたのである。これらすべての音頭取りをしたのが、ハリコフ大学から転学してきたペテルブルグ大学生のピョートル・シェヴィリョフとウカシェヴィチとの両名であった [POBÓG-MALINOWSKI 1934: 26; 1935: 91; 佐々木 1977: 123]。

今一つは、やはり上記の両名を中心として進められた郷友会連合の結成である。各郷友会はそれまで図書の相互貸借程度の交流しか行っていなかったのを、2月19日の「農奴解放25周年記念日」に久々に成功した墓参デモを契機に、統合の気運が生まれ、

このほど正式に発足の運びとなったものである。連合傘下の郷友会は13~14ぐらいだったと言われるが、ここでは、ドン、クバン地方のコサック郷友会代表としてオレスト・ゴヴォルーヒン、そしてシムビルスク県、ヴォルガ流域の郷友会を代表してアレクサンドル・ウリヤノフ（レーニンの兄）が連合評議会のメンバーだった事実を記すにとどめよう [佐々木 1977: 122-123; POBÓG-MALINOWSKI 1934: 26; 1935: 91-92]。

郷友会連合は「力試し」として、1886年11月7日の作家ドブロリューボフの25回忌を期して墓参デモを企画し、敢行した。今回は、2月19日の時とは違って、墓のあるヴォルコヴォ墓地が警官隊によって包囲され、代表の献花のみが許された後、解散が命じられたため、デモ隊は結局ネフスキー大通りで機動隊と衝突し、40名とも150名とも伝えられる逮捕者が出た。逮捕者はその後ペテルブルグから追放された [POBÓG-MALINOWSKI 1934: 27; 1935: 92; 佐々木 1977: 122, 124]。大量の逮捕者にもかかわらず主催者は、この1500名もの参加者を集めた大デモを成功とみなしたようである。何よりもまずは、学生の力の結集と示威が実現したことが多とされ、次いではかなり短絡して、力には力を、即ちテロルの問題が「組織的テロル」の形で提起されたのである [POBÓG-MALINOWSKI 1934: 27-28; 1935: 93-94; 佐々木 1977: 136-137]。

郷友会連合の主唱者だったウカシェヴィチとシェヴィリョフは連合をはなから革命組織と位置付け、その後展開した様々な活動は、学生の間に革命的情况を醸成する事もさることながら、むしろそこから革命の戦士、「最も責任感が強く、“寸毫の迷いなく”革命の大義へ奉仕する用意ある分子」 [POBÓG-MALINOWSKI 1934: 26; 1935: 92] を捕捉する事を目的としていた。後述のように、わがプロニスワフも結果的にはウカシェヴィチによって「捕捉」された事が明らかだが、それが何時、如何にしてなされたかは、必ずしも明らかでない。ただし、少なくとも1886年の秋以降、即ち法学部1年生となったプロニスワフは、もろに上記の動きの渦中にいた訳で、「学生食堂」では単なる利用者であるばかりでなく、その運営に協力した可能性すら十分に考えられ、さらに言えば、入学早々に組織された「ドブロリューボフ・デモ」には、その後の彼の行動様式から察するに、参加しなかった筈はないと断言できる。しかし、これらはあくまでも蓋然性であって、実のところは残念ながらよく判らないのである。

ペテルブルグにおけるプロニスワフの所在が紛う方なき事実として確認できるのは、彼が1887年3月14日、下宿先で逮捕された時である [JĘDRZEJEWICZ 1977: 38]。大変に皮肉な事であるが、これ以降のプロニスワフは権力の厳重な監視下に入ったた

め、尋問、裁判などを通じてそれ以前の動静もちらほらと明るみに出されるとともに、彼の肉声らしきものも聞こえて来るようになるのである。それにしても、何故に彼は逮捕されねばならなかったのだろうか。

話は数か月前に遡るが、前記のウカシェヴィチとシェヴィリョフは、権力と直接対峙するためにテロリスト組織を結成した。これが何時正式に発足したかは、必ずしも明らかでないけれども、ウカシェヴィチの回想によると、両名は1886年の10月末か11月初めに友人のドミートリー・ズヴェリエフへ参加を呼びかけたところ、後者は自分の代わりに信頼のおける友人のワシーリー・オシパーノフを推薦してきた [KUKASZEWICZ 1981: 32] とあるから、遅くとも「ドブロリユーボフ・デモ」の準備段階には既にオルグが進行中であったと考えてよい。このテロリスト組織は後に「人民の意思党テロリスト・フラクション」と正式に名乗るようになるが、実のところ弾圧の結果消滅していた「人民の意思」党とは組織的にも人脈的にも何ら関わりなく、理論面では折衷主義、実践面では「人民の意思」党のエピゴーネンである、と言うトロツキーの厳しい極め付けが恐らくは正鵠を得ているだろう。幸いにも、このテロリスト組織とその活動に関しては埼玉大学の佐々木照央氏が詳細かつ明快な論文「アレクサンドル・ウリヤノフと「人民の意思」党テロフラクション」を発表しておられるので、特にその思想的、社会・政治運動的評価については同論文 [佐々木 1977] を参照されたい。

ウカシェヴィチ、シェヴィリョフらの掲げる「組織的テロル」の第1の標的とされたのが、皇帝アレクサンドル3世である。皇帝暗殺計画は1886年の暮れから1887年1月中旬にかけて練り上げられた [POBÓG-MALINOWSKI 1934: 28-29; 1935: 94]。彼らは直ちに分業体制を敷き、実行部隊の組織化をシェヴィリョフ、そして爆弾製造と資金調達はウカシェヴィチが指揮する事になった [POBÓG-MALINOWSKI 1934: 26; 1935: 91]。既述のように、ウカシェヴィチはヴィリニユスの出身だから、彼のオルグの触手は当然の成り行きとしてヴィリニユスの出身者並びに在住者へも伸ばされ、かくしてピウスツキ兄弟も「捕捉」されることとなったのである。以下では、プロニスワフに照準を合わせつつ、「事件」の経過を追うことにしたい。

1887年1月の半ば、私用で上京してきたヴィリニユスの革命組織の指導者アントニ・グナトフスキにベテルブルグのテロリストたち（その中にウカシェヴィチのいた事は確実で、さらに言えば、彼は自分からウカシェヴィチを訪ねたのではないかと思われる——筆者注）が接触する。皇帝暗殺計画を打ち明けられたグナトフスキは、協力を約してヴィリニユスへ戻った。その際に引き受けた初仕事は、当時の帝都では既に

入手が困難となっていた劇薬ストリキニーネとアトロピンの大量調達であった。グナトフスキは同志のイザーク・デンボと相談して、たまたまクリスマス休暇で帰省中のブロニスワフ・ピウスツキに白羽の矢を当てる。ブロニスワフは、「恐らく暗殺計画については何も知らされないまま」それを引き受け、実行した。薬品の入手を知ったグナトフスキは、(予定の行動だったと思われるが——筆者注) ペテルブルグへの運搬をも改めてブロニスワフに依頼した。ブロニスワフはためらいを覚えながら、遂にそれも引き受けてしまった。しかし幸いな事には、次に述べるような経緯のためにブロニスワフはこの責を免れる事ができたのである [POBÓG-MALINOWSKI 1934: 29; 1935: 95]。

一方ペテルブルグでは、ダイナマイトの原料である硝酸の製造が間に合わず、これまたグナトフスキの助力を仰ぐ事に決した。ウカシェヴィチは、ヴィリニユスでペテルブルグからの使節を安全に受け入れてくれる人物の照会がシェヴィリョフから届くや、直ちにブロニスワフの名前を告げたものの、住所を知らないため、それをブロニスワフの学友コンスタンティ・ハモレツキに問い合わせる必要があった。かくして、使節に指名されたペテルブルグ大学生、ミハイル・カンチェルは2月12日、ウカシェヴィチとハモレツキからの2通の紹介状を携え、硝酸、ピストル2丁、1.5オンスのストリキニーネ、そして100ルーブルのカンパをヴィリニユスで調達せよとの密命を帯びて、ピウスツキ家の扉を叩いたのである [JĘDRZEJEWICZ 1977: 38; ŁUKASZEWICZ 1977: 36; POBÓG-MALINOWSKI 1934: 29-30; 1935: 96]。

ウクライナ人学生のカンチェルはまだ暗殺計画を知らされておらず[ŁUKASZEWICZ 1977: 36]、またブロニスワフとは大学内で軽い面識もあったから、ピウスツキ兄弟の案内で市内観光も楽しんだようである。その途中で兄弟はデンボと連絡をとり、デンボの手引きによりカンチェルは路上でグナトフスキと会い、ペテルブルグの要請を伝える事ができた。グナトフスキは直ちにピストルの調達をブロニスワフに依頼したが、不首尾に終わったため、ブロニスワフはカンパの費用のうち40ルーブルをポケット・マネーで立て替えて埋め合わせをしたのだった。夜になるとカンチェルは伯母のステファニア・リプマヌヴナの家案内され、兄弟とも泊り込みで何くれとなく彼の面倒を見た [POBÓG-MALINOWSKI 1934: 30; 1935: 96]。

翌2月13日早朝、ブロニスワフはカンチェルの世話を弟のユゼフに託して、ペテルブルグへ出発した。ユゼフは兄の言い付け通り、街の地理に不案内なカンチェルのガイドを買って出て、グナトフスキ、デンボとの再度の会談のお膳立てもした。その際グナトフスキに紹介された薬剤師、ティトゥス・パシュコフスキを通じて、カンチェ

ルは必要とするすべての化学薬品のみならず、ピストルまでも入手が叶い、使節の面目を施す事ができたのである。彼は2月15日、2箱に納めた化学薬品とピストルを携えてペテルブルグへ帰着、駅頭に出迎えたアレクサンドル・ウリヤノフに手渡した。しかし後に判明したところによると、薬品のうち硝酸は品質が悪すぎて使いものにならず、また劇薬も量が少なすぎたと言われる。カンチェルはまた、150ルーブルのカンパをプロニスワフ・ピウスツキ経由で届けると言うヴィリニユスの同志たちの伝言も託されていた。数日後に150ルーブルが到着すると、プロニスワフはヴィリニユスで用立てた40ルーブルを差引いた残りの110ルーブルをウカシェヴィチに届けている [JĘDRZEJEWICZ 1977: 38; ŁUKASZEWICZ 1977: 37; POBÓG-MALINOWSKI 1934: 30-31, 1935: 97]。

ヴィリニユスの革命組織の協力はその後もさまざまな形で継続されるが、以下ではピウスツキ兄弟が直接に関わったと思われる2つの挿話に限って略述しておこう。

まず、ペテルブルグのテロリスト組織の要人2名の国外逃亡幫助がその一である。これは、3月4日、別件で警察の執拗な尾行を受け、逮捕はもはや時間の問題となったオレスト・ゴヴォルーヒンと円満裡に戦列を離脱したニコライ・ルデヴィチの両名が亡命のためヴィリニユスへ逃げて来たので、彼らの国外脱出に手を貸したものである。その際ユゼフ・ピウスツキはゴヴォルーヒンを自宅に泊めただけでなく、グナトフスキの指示によって彼の出国をペテルブルグのプロニスワフ宛に打電している [JĘDRZEJEWICZ 1977: 38; POBÓG-MALINOWSKI 1934: 31; 1935: 97]。

その二もほぼ同じ頃の出来事だが、ペテルブルグのウカシェヴィチより、彼が製造した爆弾のテスト要請があり、爆弾も送られて来たので、ヴィリニユスでは町の郊外で密かに爆発実験を試みたものである。実験成功を伝える電報がペテルブルグへ送られた [POBÓG-MALINOWSKI 1934: 31; 1935: 97-98]。この際は、誰が打電したのか定かでないけれども、ウカシェヴィチもグナトフスキも革命家としての警戒心は十分に備えていたようだから、ここもやはりユゼフからプロニスワフへ送られたと見るのが順当であろう。

3月9日の夕刻、ペテルブルグのテロリスト組織はカンチェルとピョートル・ゴルクンの同居する下宿において、最初で最後の総会を開催した。初顔合わせの者もかなりあった。3月1日に突然、結核療養のためクリミアへ旅立ったシェヴィリョフに代わって、アレクサンドル・ウリヤノフが主宰した。総会ではアレクサンドル3世暗殺計画の詳細が述べられたあと、爆弾の構造とその使用方法が説明され、さらに爆弾が発射の際には皇帝の馬車に近付いて、至近距離から皇帝へ向けてピストルを発射すると

いう決議が採択された [POBÓG-MALINOWSKI 1934: 32; 1935: 99; 佐々木 1977: 126-127]。わがプロニスワフは、果たしてこの総会に出席していたのだろうか。

総会の終了後、ウリヤノフは実行部隊の指揮者であるオシパーノフに対して「テロリスト・フラクション」の政治綱領を特訓して、逮捕に備えた [POBÓG-MALINOWSKI 1934: 32; 1935: 99-100]。

ウリヤノフは引き続いて「人民の意思党テロリスト・フラクション綱領」の執筆にとりかかった。3月11日、これを摺筆したウリヤノフは、直ちにその印刷を開始するが、結局ゲラ刷りが仕上がっただけで、遂に完了には至らなかった。この際に印刷の場所として自らの下宿を提供したのがプロニスワフ・ピウスツキであるが、それはウカシェヴィチの依頼に応えたものであった [JĘDRZEJEWICZ 1977: 38; ŻUKA-SZEWICZ 1981: 46; POBÓG-MALINOWSKI 1934: 33; 1935: 100]。

総会の明るる日の3月10日、オシパーノフを指揮者とする実行部隊が皇帝の姿を求めてネフスキー大通りへ初出動した。一行は投弾係のオシパーノフ、ワシーリー・ゲネラロフ、パホームシュ・アンドレーユシュキンと信号係のカンチェル、ゴルクン、ステパン・ヴォロホフの6名で、投弾係は爆弾とピストルを隠し持っていた。この日は皇帝がイサーク寺院へ行幸する事になっていたが、遂に姿を見せず、一行は空しく引き揚げざるをえなかった。3月12日の第2回出動でも、実行部隊は待ちぼうけを喰わされる結果となった。翌13日（露暦3月1日）は、1881年に暗殺された先代皇帝の6回目の命日に当たるので、皇帝のペトロパヴロフスク要塞詣では必至と言う事で、一同は決行を誓いあって解散したのである [POBÓG-MALINOWSKI 1934: 32-33; 1935: 94-95, 100]。

さて、3月13日の午前10時頃、ネフスキー大通りのアニチコフ橋付近を遊弋中の実行部隊は警察の不審尋問に遭って一網打尽に逮捕され、かくてアレクサンドル3世暗殺計画はあえなく未遂に終わってしまった。逮捕の糸口となったのは、アンドレーユシュキンが恋人のセルジュコワに宛てた2月27日付けの手紙である。開封検閲で、死地に赴く決意と皇帝暗殺を示唆する内容が咎められて、アンドレーユシュキンが割り出されるまでにそう時間はかからなかった。以来彼は要注意人物として警察にマークされていたのである。その彼が3月12日にネフスキー大通りで5人の若者と連れ立っているところが見咎められ、翌日も同じ顔触れがネフスキー大通りで確認されたため身柄を拘束して取り調べを受ける羽目に陥った次第である。警察は逮捕時まで、皇帝暗殺計画については全然情報を掴んでいなかった。一方、アレクサンドル3世はこの日、馬車の手配に手間どって出発が30分遅れた [佐々木 1977: 120, 127; INOUE

1985: 3-4; JĘDRZEJEWICZ 1977: 38; POBÓG-MALINOWSKI 1934: 33; 1935: 100-101]。皇帝が定時に出発していた場合、もしかするとこの暗殺計画は未遂に終わっていなかったかも知れない。

逮捕された6名のうちカンチェルとゴルクンは、取り調べに耐え切れず、その当日から自白を始める始末で、この結果、13日にウリヤノフ、14日にウカシェヴィチとブロニスワフ、そして19日にはヤルタでシェヴィリョフと言う具合に殆どすべての関係者が逮捕されていた。ただグナトフスキとデンボだけが、国外脱出に成功して逮捕を免れた。カンチェルはさらに、ヴィリニウスへ出張する警官に同行して、捜査に協力を惜しまなかった。かくしてユゼフもヴィリニウスで22日に逮捕されて、4月1日には他の仲間ともどもペテルブルグへ護送された [JĘDRZEJEWICZ 1977: 38-39; POBÓG-MALINOWSKI 1934: 33-34; 1935: 101]。

逮捕者のうち起訴された15名の被告は、4月27日から5月1日まで元老院に特設された法廷で審理された。5月1日の判決は全員が絞首刑であったが、罪状を認めた者や嘆願書を出した者については、ドストエフスキの小説にもあるように、「皇帝陛下の慈悲」によって罪一等が減ぜられて、以下のような量刑が確定した。死刑——ウリヤノフ、シェヴィリョフ、オシパーノフ、アンドレーユシュキン、ゲネラロフ、無期懲役——ウカシェヴィチ、ノヴォルースキー(爆弾製造に場所を提供)、懲役20年——アナニイナ(爆弾製造の場所を提供)、同15年——ブロニスワフ・ピウスツキ、同10年——カンチェル、ゴルクン、ヴォロホフ、パシュコフスキ、シベリア追放——シュミドワ(爆弾を運搬)、禁固2年——セルジュコワ(アンドレーユシュキンの恋人)。ウリヤノフ以下5名の死刑囚は、5月20日シュリッセルブルグの刑場で絞首刑が執行された。その他に約50名が行政的措置によって(即ち、法廷手続きを経ないで)シベリアへ送られた。例えば、証人として喚問されたユゼフ・ピウスツキは、懲役5年の刑でシベリアへ流されたのである [佐々木 1977: 120; INOUE 1985: 5; JĘDRZEJEWICZ 1977: 39; ŁUKASZEWICZ 1981: 78; POBÓG-MALINOWSKI 1934: 34; 1935: 104]。

ブロニスワフの量刑「サハリン島流刑、懲役15年」が妥当か、それとも重すぎるかは問うまい。それは裁判官の仕事だからである。しかし彼が何ゆえに有罪とされたか、彼に対する告発は何であったかは、明らかにされねばならない。実を言うと、それは既に明らかとなっているのである。と言うのも、上に記した1887年以降の彼の動静は、殆どすべてが取り調べ室での尋問記録や法廷での審理記録に由来するからである。彼に対する告発は、テロリスト組織の綱領を印刷するために自分の下宿を提供した事、

ペテルブルグとヴィリニユスの両組織を結びつけるために手を貸した事の2点に尽きる。いずれも二つのものを結びつけるフィクサーの役割であり、ここにこそプロニスワフの才能が存すると言っても過言ではない。ところが権力は彼のこの才能の所産を犯罪と認定したわけで、彼にとっては甚だ不幸な事であった。

やや視点をずらして、この皇帝暗殺未遂事件とプロニスワフの関わり合いを問題にしてみたい。これには客観的側面と主観的側面があるから、まず前者から検討する。

客観的にみるなら、1887年1月以前はテロリスト組織と直接の交渉はなかったとみてよい。2月段階ですら組織内で彼を知る者はウカシェヴィチだけで、そのウカシェヴィチにしてからがヴィリニユスの彼の住所は知らなかったからである。カンパに立て替えた40ルーブルをちゃんと回収するプロニスワフからも、ホットな関わりが感ぜられない。しかるにである。大変な危険を冒して、自分の下宿を印刷場に提供するのは、いくらウカシェヴィチのたつての頼みだったにしても、余りにも過激に過ぎまいか。少なくとも、凡人の筆者にはそう思えるのである。

主観的側面はプロニスワフ本人をして語らしめねばならない。幸いプロニスワフの法廷陳述としてよく引用される箇所があるので、以下にそのまま転載する。「プロニスワフ・ピウスツキは自らの革命的見解を隠そうとしなかったが、テロルには反対であった。全体として彼の役柄は脇役だったと述べており、確かに他の人々の手助けはしたが、それは自分の優柔不断と頼まれたらいやとは言えない性格に由来する、と説明した」[JĘDRZEJEWICZ 1977: 39, cf. POBÓG-MALINOWSKI 1934: 34-35; 1935: 103]。

またこれは弟のユゼフの伝えるプロニスワフ発言であるが、ユゼフは1893年、ロンドンで発行のポーランド誌『曙光 (Przedświt)』へ寄稿した記事の中で次のように記している。「プロニスワフは皇帝暗殺事件への自らの参加を誤りとみなしており、同事件へ否応なく彼を引きこんだロシア人の仲間たちの事を苦々しげに語っていた。」[POBÓG-MALINOWSKI 1935: 106-107]。ユゼフは刑期を終えてシベリアから帰還した直後にこれを執筆している。

逮捕後のピウスツキ兄弟がゆっくり対話する機会はありませんでしたし、この当時プロニスワフはまだサハリンにいたから、恐らくは手紙のやりとりの中でこの対話は成立したと思われる。ところで、法廷陳述を額面通り受け取る事は致しかねるけれども、プロニスワフのそれは上記の彼の発言ともおおむね符合するところから、少なくとも事件後における彼の主観的評価はこのようにかなり否定的だった、とみなしてよからう。

さて、両側面を併せ考えると、プロニスワフはテロリスト組織に対して思想的には共鳴するも、その手段と行動を是認できぬ同伴者、結果的には被害者だった、と言うのが大勢であろうか。しかしながら、印刷場提供などの事実は、単に性格の弱さや決断力の不足に起因するばかりでなく、葛藤を抱えつつ主体的に「歴史」と関わった結果でもあったのではなからうか。

事件関係者として逮捕された者はすべて、取り調べと裁判の進行中全くの隔離状態におかれ、新聞、書籍の閲覧はおろか、面会も一切許されなかった。ペテルブルグ在住の従姉妹、ビルレヴィチュヴナのピウスツキ兄弟に対する度重なる面会申請は黙殺された。ユゼフのあとを追って上京した父親のユゼフも執拗に面会請求を続けたが、やっと許可が下りたのは判決の2～3日後であった。父親が息子の独房にはいるや、扉は直ちに閉めて施錠された。こうして親子は半刻ばかり水入らずの対面ができたのであるが、父は、そして息子は、何を語ったのだろうか。その内容は伝えられていない [POBÓG-MALINOWSKI 1935: 107]。

父ユゼフにはその後、ペテルブルグの駅頭で今一度プロニスワフと眼差しを交わす機会があった。プロニスワフにとっては、これが父との最後の別れとなった。

それはプロニスワフのペテルブルグ出発の日のことである。父は早朝より、警官の非常線が張り巡らされた駅前広場の一角に立ち尽くして、護送馬車の到来を待った。やっとのことで馬車は到着、既決囚たちは一人ずつ下車させられ、見送りの人々はこれを遠くから見守ったのである。ピウスツキ父子の永遠の訣別を、同行したジクムント・ナグロツキは次のように記録している。「プロニシは、ぐるりと見回して、“私たちを認めた”。」 [ibidem]。

プロニスワフはここで護送列車に乗せられて、モスクワ経由でオデッサへ移送された。彼がオデッサにいつ到着したかは明らかでないけれども、父親の見送りが可能だった事から推して少なくとも5月中にはペテルブルグを離れたと考えられ、もしもモスクワに長期留め置かれなかったとすると、6月にはこの南露の港町に着いた筈である。筆者の試算によれば、遅くとも7月の初旬には [INOUE 1985: 6]、サハリン流刑を宣告されたプロニスワフと3名の信号係（カンチェル、ゴルクン、ヴォロホフ）はロシア義勇艦隊の便船に乗せられ、サハリンへ向けてオデッサを出発している。この蒸気船には、やはりサハリンへ移送される600名もの刑事犯が積みこまれており、彼らは恐るべき衛生状態と人的環境の下に、スエズ運河、インド洋、日本海を、ひたすら「東」へ向けて航海を続けるのだった [CLARUS 1908: 10; INOUE 1985: 6; SIEROSZEWSKI 1921: XIII]。プロニスワフは時に20歳である。

文 献

井上 紘一

- 1983a ピウスツキ兄の復権を(上・下)『朝日新聞』昭和58年7月21日, 22日付。
 1983b プロニスワフ・ピウスツキ(仁)『えうゐ』12号 pp. 24-36, 東京, 白馬書房。
 1986 博愛家ピウスツキと蠟管——幼少年時代『ピウスツキ録音蠟管研究の歩み。昭和58年
 ~昭和61年』(朝倉利光・伊福部達編集) pp. 29-32, 北海道大学応用電気研究所。

木村 毅

- 1961 ピルスーツキーと二葉亭——ポーランド独立史の舞台裏『世界』181号 pp. 345-356,
 岩波書店。

新渡戸 稲造

- 1935 『偉人群像』(13版) 東京, 実業之日本社。

佐々木 照央

- 1977 アレクサンドル・ウリヤノフと「人民の意思」党テロフラクション『埼玉大学紀要
 (外国語学文学篇)』11巻 pp. 117-144, 埼玉大学教養学部。

安井 亮平

- 1971 館蔵二葉亭四迷宛ピウスツキ書簡(翻刻・訳)(二)『早稲田大学図書館紀要』12号
 pp. 26-59。

ARMON, Witold

- 1981 Piłsudski (czasem podpisywał się Ginet-Piłsudski) Bronisław Piotr. *Polski Słownik
 Biograficzny*, XXVI/2 zeszyt 109, pp. 305-308, Wrocław-Warszawa-KrakówGdańsk-
 Łódź, Wydawnictwo Polskiej Akademii Nauk.

CLARUS,

- 1908 Dwadzieścia lat na Sachalinie. Losy i prace naukowe Bronisława Piłsudskiego.
Świat 12: 10-11.

GARLICKI, Andrzej

- 1979 *U Źródle obozu belwederskiego*. Warszawa, Państwowe Wydawnictwo Naukowe.

HUMPHREY, Grace

- 1936 *Piłsudski. Builder of Poland*. New York: Scott & More.

INOUE, Koichi

- 1985 A brief sketch of Br. Piłsudski's life (until his exodus from Sakhalin). *Proceedings of the
 International Symposium on B. Piłsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, pp.1-9,
 Executive Committee of the International Symposium (ed.), Sapporo: Hokkaido
 University.

JĘDRZEJEWICZ, Waclaw

- 1977 *Kronika Życia Józefa Piłsudskiego. 1867-1935*, tom I. *1867-1920*, Londyn: Polska
 Fundacja Kulturalna.

LANDAU, Rom

- 1930 *Piłsudski. Hero of Poland* (translated by Geoffrey Dunlop), London: Jarrolds Publishers.

ŁUKASZEWICZ, Józef

- 1981 *Pierwszy marca 1887 roku. Wspomnienia Józefa Łukaszewicza*, Warszawa: Państwowy
 Instytut Wydawniczy [原典: Лукашевич, Иосиф Д. 1920, 1 *Марта 1887 года*.
Воспоминания И. Д. Лукашевича, Петроград].

PATTERSON, Eric F.

- 1935 *Piłsudski. Marshal of Poland*, Bristol: J. W. Arrowsmith.

PEŁCZYŃSKA, Wanda

- 1934 Zułów—kolebka marszałka Józefa Piłsudskiego. *Ziemia* 1934 nos. 7/8, pp. 139-146.

PIŁSUDSKI, Józef

- 1931 *The Memories of a Polish Revolutionary and Soldier* (translated & edited by D. R. Gillie),
 London: Faber & Faber Ltd.

井上 プロニスワフ・ピウスツキの不本意な旅路

POBÓG-MALINOWSKI, Władysław

1934 Nidoszły zamach 13 marca 1887 roku i udział w nim polaków. *Niepodległość* tom X, pp. 21-35.

1935 *Józef Piłsudski. 1867-1901 (w podziemach konspiracji)*, Warszawa: Nakład Gebethnera i Wolffa.

REDDAWAY, W. F.

1939 *Marshal Piłsudski*, London: George Routledge & Sons Ltd.

SIEROSZEWSKI, Waclaw

1921 Bronisław Piłsudski. *Rocznik Podhalański* nr. 1, pp. V-XXX, Zakopane-Kraków: Wydawnictwo Muzeum Tatrzańskiego im. dra. T. Chałubińskiego w Zakopanem.